

● HAIKU200401sono1

旧く狭く深き地下鉄十二月  
紀州より蜜柑文左の心づけ（みかん贈られ  
て）

晩菊の取り遺されし花は白  
語りたき朋あるうちの菊脛  
菊脛食うべて胃の腑ぼと点り

小春日や信号待の禿頭に  
数え日の玻璃戸磨きの向い合ひ

古本の溜め込み癖や煤籠

煤の日の石川五右衛門釜の中

またたく間ひととせ過ぎぬ金平糖

玻璃越しに日脚伸ぶ日や金平糖

散髪屋正月休とつてをり

白菜の置き処はここと干しにけり

茶碗より湯気ほのぼのと冬めけり

冴ゆる塵紫煙くゆらせ居る宙に

万年青の実ひねていやはや面白し

我が発てる埃が見えて大旦那

八百義の泥葱立たせ商へり

桜草うち過ぐるには未練あり

鉢寄せて冬の日溜り作りけり

枯蔦に暫し頤を止めけり

枯蔦に頤添はせてゆきにけり

面持ちの慥然と池の氷見る

池氷り居るといきいき云ひにけり

家鴨ごゑ氷の上を飢せり

ふるぷると羽音お池の冬日向

くつくつと云ひて家鴨の日を伸ばす

反橋は潜るものにて翔く鴨よ

鴨池より上がり零せる水の玉

広がりて氷らぬものに鴨の水脈

池氷りゆくなり鴨に係はらず

水温みゆく源は羽づくろひ

己が浮力持て余しをり漁り鴨

餌を漁る鴨のあられもなき姿

水温み初むと聞こえて鴨言葉

鴨急ぐ方面白きことあらむ

水鳥の羽ばたくことの終に無し

氷り出す池の端木は桜なり

氷りゐる池のあなたに頤向け

阿字池巡る樹間の氷かな

氷りつく他なき池を見て慥然

赤門より冬木の桜みて往かむ

人は人鴨は鴨態（なり）池の端

鴨を見て顎冷ゆる池の端

氷らざる池半分を鴨往き来

水鳥の一動きあり顔ゆるむ

虎鶉来居ると住職息白く

阿字池すべて氷るといふ訳では

池の端氷割りゐて訝られ

片鱗の春も見えぬといふに東風

虎鶉来してふ池と聞いて来ぬ

くしゃみして遅れ参じぬ円応寺

去年より咲く臘梅の臘薄日光（か）ゲ

初閻魔木魚も吐息継ぎ継ぎで

初閻魔燭惻々と伸びにけり

初閻魔眼光通らぬところ無し

初閻魔八寒地獄さながらに

閻王に見透かされをり胸の裡

鼻腔より空気出で入り初閻魔

初閻魔鼻腔より息出し入れす

鉢に張る氷の方円閻魔寺

底冷えは三和土伝ひて閻魔堂

転読僧十八人の初閻魔

閻王のお怒り解けずとことにはに

閻王のお顔の凄む堂余寒

大木魚凍みを振り切る初閻魔

初閻魔なむからかんのとらやーやあ

かんばせに転読の風初閻魔

初閻魔転読僧の夷ごゑ

閻魔詣濟みたる火鉢火のどんとろ

三椶のかほりの通路すすみけり

水仙の葉影バラバラバラバラと

切通し冬の蜂の巢落ちてゐし

道巾も程よき東風の切通し

鎌倉の何も無き冬辻明り

鎌倉の臘梅明り辻日向

紅梅や声掛けて脇通り抜け

旧正の日のつらつらと木斛に

齒朶の邊に湧き出て冬の窟清水  
海蔵寺林泉三楹に白日差  
三楹や人は本来無一物  
高浜家墓地のくわりんの落つ頃ぞ  
旧正の葉欄木洩れ日一刻受く  
星野家の墓水仙の立ち姿  
虚子墓へ年尾のくわりん供えあり  
塀内より臘梅明り溢れをり  
大雪報除雪車に蹤く救急車  
ことし又雪恒例の大試験  
降る雪に命運託す大試験  
記録的大雪北の大地に降る  
積らむと地濡らし雪のしたならし  
地鰈の煮つけ甘めや寒四郎  
地中より春もたらせる蚯蚓のいろ  
きさらぎの面廻せり日差す方  
如月の己が影法師壁に折れ  
手を遣りし先に首筋二月盡  
きさらぎのどの顔も皆勝れ見ゆ  
冬桜独り言つるを聞き損なふ  
春疾風いまだしもそこに近き吹（ふき）  
玻璃に風どすんとばかり春浅き  
屑籠の向う春荒れ庭景色  
春荒れがつつかけ来りて家が鳴る  
春荒れの勢ひ余りて竿落とす  
春荒れにうち抜くかれたる瘦軀とも  
春疾風聞きぬる我が身がらんど  
玻璃鳴らす風は日増しに春は来む  
吹っかけてつんのめる小木春荒れに  
梅咲かせて廻る美（よ）き風吹く日なり  
春先の阿波を思うてまんぼう顔  
春水といふこゑ大きめにでて  
岩から岩へごうなの六根清浄と

● HAIKU200402sono1

大根引西風（にし）強ければ荒るる沖  
覆る白涛を背に大根引  
巾着湾西風びしぴしと枯萱打つ  
大根台地一日西風の吹き荒れて  
浅田飴転がしゆけば冬雲雀  
大根台地むつつりと見て浅田飴  
藪椿林囲ひに毘沙門堂  
懸大根椿林を風除けに  
懸大根げっそり沖に逆巻く涛  
割干にいちにち海の荒れ止まず  
葉を断ちし大根満載軽トラック  
きびきびと大根引けるや風の中  
軽トラック横付けにして大根引  
光降る大根台地の大根引  
撥ね退けゆく大根台地の風厚し  
大根台地畑押し移る風一望  
大根台地涯（はたて）に狂ふ沖つ波  
浪音を吹き消す風や懸大根  
群れなして雀渡れる大根畑  
潮けむり大根台地のどん詰り  
余所者が大根台地に深入りす  
怪訝なる眼をして応対大根引  
知らなんだ大根台地に立つ風車  
光りては風にあらがふ大根の葉  
大根台地人現はれて風の遠（おち）  
背をどつく新手の風に大根引く  
四五人の遠の大根引一列  
風のなか一心不乱大根引く  
大根を引きぬし人影いつか消え  
天つ日と風を糧とし岬大根  
西風吹いて大根台地に光撒く  
軽トラック大根台地の涯（はたて）より  
台地一面大根の葉の煌めける  
吹きつける新手の風に冬ひばり  
行く先は鎌倉としぬ節分会  
建長寺八幡宮の節替り  
鎌倉五山一位禅林の梅固し  
扁額  
梅万蕾爆けて天下禅林に

追儼寺杉の合間の真澄み空  
烏帽子して豆撒木綿の直垂に  
豆撒けり天下禅林天空に  
追儼法要転読海東法窟に  
びびびと追儼会の燭伸び縮み  
法堂に太鼓どんどろ追儼寺  
櫻川びん助一座  
節分興行びん助一座かつぽれを  
赤糰奉納かつぽれ節分会  
番鳥渡らせ枯木華やげる  
手入れ佳き庭の隅々臥龍梅  
梅促す駆込寺の風や佳し  
石畳そこを歩めと梅日和  
早梅のすはえ伝ひに目を遣りて  
割烹の殖ゆる道筋迎春花  
袂持ちミス鎌倉の福まねき  
直垂に肩巾広き年男  
由比若宮遙拝所  
遙拝所きさらぎの注連一文字  
冬鳥の上枝に潜む遙拝所  
翔び発ちて枯木に紛る鶉のいろ  
春招く和菓子きざはし・段葛  
探梅の手土産鳩の豆落雁  
しんみりと十賊に節分まへの雨  
みしと来て葉欄に節分まへの雨  
明日節分雨草木をうるほして  
寺選みして例年のごと節分  
疫病神既に背負込み節送り  
探梅に持すのど飴の龍角散  
永日に透けて紅茶のジャンピング  
人參に目をうるませて湯気おじや  
水の上禽渡り来て枯枝に  
臘梅のほとほと咲きし花の光ゲ  
光溜めやつれ臘梅暮れんとす  
花保（も）ちよき二月の谷戸の墓地の供華  
石鹼玉ぶつかる小岩瞬けり  
立春の赤文字ほのと日めぐりに  
立春の四肢を伸ばせり掛布団  
金柑の晩生夕日を止めをり

● HAIKU200402sono2

フェリー過ぐ港の春寒赤燈台  
春望の甲板三百六十度  
デッキより遠望上総の春の山  
海上に太刀魚の銀うち延べて  
なめらかにピッチングして春の航  
東京湾真ん中で釣る春の魚  
風向きに舳を揃え鱈船  
昼霞天然ガス積む船の影  
船長は日永の珈琲啜りつゝ（操舵室）  
安房へ船立春を経て海大人し  
東京湾横断フェリー春濤切り  
春寒の船尾に鳴れる日章旗  
はためきて春の鷗と日章旗  
水道の風横殴り春かもめ（浦賀水道）  
甲板に海光あぶる裘  
ジェット船椿盛りの大島へ  
立春の洋上に我解き放つ  
毛衣に浦賀水道荒れてをり  
浪漫あり海猫舞ふフェリーターミナル  
紙懷炉持て余しをる暖房船  
やうやうに海落ち着いて春の航  
乗船の待人ぬくむ紙懷炉  
マフラーして乗りくる上総の女学生  
鈍行にストックの香を持ち込みて  
春灯車中にひらく文庫本  
家苞の花菜と干物臭きかな  
保田驛の鉢植え水仙真つ盛り  
花卉作り旺ん庭木にも蘇鉄  
檳榔樹そこから勇名（いさな）見えるかい  
しろがねのひつじ田半島山間部  
葭雀なまなま其処を翔てる音  
仙人掌の遮る安房の海岸線  
とびとびに雲と菜の花内房線  
安房日和花菜日和と言ひ替えて  
群れ雀上総日和のひつじ田に  
菜の花の淡々昔捕鯨の地（和田浦）  
春の雲あたかも象の縫いぐるみ  
花菜明り差し込む鯨のモニュメント  
花卉栽培発祥の地のあらせいとう

ずんぐりと蘇鉄栽培日短  
和田浦を舞台の小説菜の咲く里（田宮虎彦  
「花」）  
春濤のとよもす石碑「浜千鳥」  
煙草一本突きだし佇む梅林に  
踏切の傍に菜の花のほほんと  
悠久の青空があり花菜の上  
花菜の黄つらき小径を渚まで  
菜を摘みに車は袖ヶ浦ナンバー  
押し移る日翳は見えぬ花菜畑  
目くるめく眩しさつづく花菜径  
花菜見て昼餉鯨の竜田揚げ  
和田浦に遊んで鯨のステーキを  
くさぐさの鯨の料理菜の花どき  
突きだしに鯨の珍宝（こうがん）生麦酒  
ひつじ田の照る中往けば老け込みさう  
浦人の割干作り日が真上  
懸大根庭木の股に日陰干し  
和田浦の旧道ゆけば犬ふぐり  
蘇鉄の実床ずれをまだ抱えをり  
室咲きの極楽鳥花羽ばたきさう  
枇杷の木を驚破と翔つ鳥何だろ  
浦人の供えし霞草鮮（あたら）し  
和田浦のあらせいとうのかほる径  
おあつらえ向きの斜面に寒桜  
浦山の一谷埋めて緋紅梅  
山腹の紅梅目当てにのぼるかな  
登ることもう諦めて寒桜  
寒日和うとうと歩けば老け込みさう  
枇杷青実其処よりハツと鳥の翔つ  
花菜の径こつちを往けば養蜂場  
浦人の花より享け継ぐ花ごころ  
赤錆の鉄路に沿ひて金盞花  
金盞花畑の中の石祠  
和田浦の金柑海に照り負けず  
和田浦は濤を目の前ポピー畑  
南房の浜に遊んで枯はまゆう  
南房の花摘み濤色スターチス  
胸先に鏡びかりの春の海  
半日影三時廻りし花菜畑

ハウス物あらせいとうを家苞に  
古草につらつら安房の日の射せる  
古草の隙間を抜けて上総の日  
上総の日隙間だらけの古草に  
和田浦をうらうら歩けば干し鯛  
花菜見に足を延ばして江見太海  
小漁港遠望花菜ちりばめて  
花菜の香むんむん太海小学校  
七輪に太海の鯛味見して  
水揚げ場鯖鯖の太海港  
さざゑ漁仁右衛門島の岩隠り  
ふなばたに箱眼鏡のみ新しや  
水視見漁（みずきりよう）木地新しき箱眼  
鏡  
錨アロエ枯草部落の端  
小漁港遅日干し場の細丸太  
屋号入りリヤカーしこたま鯖積んで  
海老網の岩場に干され春の色  
花菜など花の太海の無人店  
烏賊漁の合間を縫ひてなまこ漁  
永き日の海老網を干す岩場かな  
太海駅降り立つ途端春陽気  
冬日向五人掛りの網繕ひ  
精しくはアイスランドポピーとか（太海フ  
ラワーセンター）  
アロエ咲く仁右衛門島へ手漕ぎ舟  
笹鳴のそつちへ行けば島の端（はな）  
仙人掌の棘残寒の空を刺す  
句碑の裏日がなとよもす春怒濤  
水仙のすがれて島の日陰径  
島椿落つ只中に弁財天  
鳶の糞垂れける島の明日葉に  
明日葉の小径巡らせ島遅日  
笹鳴の姿見せけり海桐の枝  
笹子来て島の竹藪こそつかす  
表札に平野仁右衛門とぞ日永  
島は遅日の細道に蔓日々草  
何鳥か島の枯草こそつかせ  
島主の石垣困ふ枯とべら  
島端（はな）の岩礁錆びてアロエ咲く

春望の真砂女の句碑は目の高さ  
句碑表テ鏡びかりに水仙花  
うなばらに風の道あり春かもめ  
壽老人弁天在（いま）す島の春  
春望の仁右衛門島の頂に  
渡船待つ仁右衛門島の冬日向  
冬ざれのものの高きに島の鳶  
向き向きに上総三浦の春灯  
春夕焼け聳（た）たする富士のシルエット  
春の航瞬く緑は燈台光  
団雲の密なる間へ春入日  
残寒の泪目甲板（デッキ）に吹かれゐて  
春星は片雲の上なほも航く  
春夕焼陸（くが）の涯（はたて）を染め上  
げて  
春夕焼目に焼きつけて甲板（デッキ）の上  
春の海波間に零すフェリーの灯  
船室にそこはか薫るあらせいとう  
春を待つ裏山に入り芹下見  
少しもの足らぬ花数ハケの梅  
心憎き苔のつき方臥龍梅  
風の底地に張りついて鼓草  
陰影の移ろひ易き春の雲  
甘んじて小さき野蒜も引きにけり  
鼓草野面を吹ける風の音  
芹摘の誰かはまりし足の跡  
雑木山百度鳴りて寒明けぬ  
立春を相変はらずの坊主山  
山の窪蝌蚪あなければ引き返す  
殺到せる容に蝌蚪の屯せる  
それではとものは試しの紙懐炉  
紙懐炉そんな齡では無けれども  
ぽと点り一点の暖紙懐炉  
蝌蚪はまだ微動もせざり風の底  
芹の水覗き込むにも先づ足場  
芹引けばたらたらと水一縷  
泥の上うすうすながれ芹の水  
梅見茶屋バタバタ組立てロケセット  
さんしゆゆの天辺に日の当りをり  
夕空を日当りながら春の雲

夕雲も春立つ白を帯び飛び飛べり  
しろしろと雲に春立つ雑木山  
風の日のかばかりの鴨池の端  
春の雲むつりすすむ雑木山  
寒明の白雲生々しき雑木  
万作と夕空つりあひとれてをり  
春立ちしこと流雲の端々に  
そつけなき彩の白梅朧に  
盗み見をしてゐるやうな藪椿  
寒明けし夕空の下頬締る  
それでも蝌蚪何處ぞに居ぬかと沼覗く  
一枚の板され渡し蝌蚪覗く  
探梅といふにはあつさり戻り来ぬ  
あつさりと白梅離る遠の人  
寒む空の一部を占めて一立木  
幸せの容真上に春の雲  
裏山はだうなつてゐる旧七草  
孫の手を入れ難き服日短  
灰皿をこまめに替えて日短  
ポットに湯継ぎ足してをり日短  
電気毛布詠むなら尻焼猿人（しりやけさる  
んど）風  
城郭の一部をなせる梅の花  
海原に春の団雲吹き寄せられ  
寒明と探りを入れるやうな眼を  
花アロエ冬百日を通し咲  
海辺の我が家の上を春の雲  
寒明の家震ふ風夜も絶えず  
春寒の家押す風の音どすん  
夕空に余寒のテレビアンテナ群  
寒明けしこと服薬の呑み水にも  
寒禽の影を翔たせて檜太枝  
春の雲頭の中を空にして  
春の雲見てゐる我も押し移る  
戻ればまた照る春の雲なりし  
三月の雲を見てゐる窓ほとり  
輝きをまた取り戻す春の雲  
初国旗見てゐてロールシャツハ法  
改札にべつとう時化の欠航札  
欠航にて安房の雛罌粟摘がふい

べつとう時化崎の雑木を揺さぶりて  
群衆の隙間に落ちぬ年の豆  
大根畑西風（にし）に雀の顔細め  
春の雲西風吹き荒れて一掃す  
春寒の薄皮纏ふあんこ玉  
あんこ玉薄皮冴えに冴えにけり  
春の雲根こそぎ吹かれ陸の果  
冴えわたる空の端雲の吹き溜り  
銜はずに本音をずばり青々忌  
鎌倉に当てもなく来て実朝忌

● HAIKU200402sono3

親指をこごぞと使ひ朱爨剥く  
只横に並べてひひな飾りけり  
雛飾る早い分には佳かるべし  
雛調度嬰にいじられて仕舞ひけり  
春荒れの風だけかいや雨交じり  
春荒れがこれだけ吹けばと寝落ちたる  
春荒れのまだ吹いてをり寝るとせり  
春荒れに家中の戸が鳴りにけり  
春荒れの一夜過ぎしと目覚めごゑ  
春荒れの家搏ち跳ね返さるる音  
春荒れの一ト間に延べし二夕蒲団  
春荒れに小気味よき程夜の雨  
春荒れの吹っかけ来たる真夜の雨  
春荒れに目覚めて暫し夜の天井  
春荒れの何倒す音夜通し読む  
春荒れの間の一日鏡ぞら  
春荒れの叩きつけてはひつpegがす  
匙もつて苺をつぶすこと一途  
今朝もまた聞きて一ト声春の鴝  
濡れ縁にて孫の接待しゃぼん玉  
春なれや暗き寢床を蹴りて起つ  
棒にふる来し方思ひ焦げ目刺  
椿餅えにしの一入また欠けぬ  
春の月幹といふ幹あらけなく  
万作咲いて二日も経たぬに傷み出す  
風吹けば万作が咲くことし又  
万作が皮切り小庭賑やかに  
鯛買ふ小田原産の標示見て  
味噌汁にみどり浮き立つ葱の芯  
春の鴝わが近隣に顔出して  
毎日を籠もりてゐては白もやし  
一つづつ物片付けて日脚伸ぶ  
日脚伸ぶことを梢に確かむ日々  
日脚伸ぶ鈴懸の実をあふぐにも  
薄情に大冬木伐り倒されてあり  
人間の勝手で伐らる枯並木  
沈丁や制服組の葬儀かな  
牛蒡ばかり食はする妻のおたんこなす  
鴨と鴝區別がつかずそれを詠む

この處続けて出沒春の鴝  
崎人の顔色のよき大根引  
崎人に白群青（びやくぐん）の空大根引く  
大根を旺んに引くや鳶に西風（にし）  
海風に躰を張りて冬ひばり  
三崎には三崎の気風げそ煮の香  
鏡風切干は瘦せ細りけり  
バス停の一寸先なり草餅屋  
夕ぞらの辰砂いろより京人參  
日溜りの枯枝に葉痕ぼっこりと  
蓮の骨影へらへらと笑ひけり  
轟々と如雨露に水容れ春の昼  
ぎうとこゑ居ること確か春の鴝  
年寄りのまたはぐらかしあんこ玉  
閑日をぎうと縮めて春の鴝  
もう一ト声あればと待たる春の鴝  
万作は微風を糧として漫ろ  
雛飾る孫二人目の春なりけり  
眼が冴えて眠りに就くまであらぬ事  
寢床にて読む書片手に春灯  
豆ランプ点し春夜の帰宅待つ（次男）  
接骨木の芽のもし囁くなら平語  
閑日のコンビニ伊予柑選りゐたり  
内のがと云ひて鱧子のお裾分け  
先達あり渡る鴨にも吾が身にも  
繊維質をうんぬんけふも牛蒡出づ  
春寒の日々大人しく家居して  
晩菊の年越してまで咲かうとは  
梅汚れゐる頃ならむ瑞泉寺  
山梔子の実に手をつける鴝なりし  
鴝猛るが如くに芯の徹る句を  
むつくりと聞き捨てならぬ春の鴝  
始めてや山梔子啄む鴝なんて  
鴝のこゑぎうと締まりて味噌汁に  
山梔子を喰ひ散らかせる鴝となり  
人の句が皆うまく見え春苺  
トチオトメなんて名のつく苺食む  
春は曙けふあれをしてこれをして  
万作の髯を揺らして風鮮らし  
物申（ものまう）と風に万作口を切る

梅鼠の空見渡して春の暮  
遠景の暮れてゐるなり退紅（あらぞめ）空  
直ぐ染まる空は正直春の暮  
空模様読んで寒天作りかな  
天麩羅の江戸前小柱春浅し  
春そこに通草細工の鳩車  
川風に鼻昂然と冬磧  
ゾツとする板の間夜間残尿感  
春先の花壇如雨露の水剩る  
現れしばかりの干潟を翔けて鷗どり  
書きかけの霾といふ字に日脚伸ぶ  
日脚伸ぶといふこと鷗の胴あふぎ  
分厚きは伊予柑の皮この手ざはり  
一粒づつ苺をつぶす時間かな  
日脚伸ぶてふこともまた齢なり  
日が入り過ぎてても困る冬机  
春遅々と幹の表に日が当り  
春の来るまで突つ張つてゐし櫟  
ばうばうの庭木の枝に春没日  
醬油好きいつになつてもはうれん草  
部屋に一人焼藪の香と漂へる  
焼藪の皮と留守番したりけり  
山に入り雑木ばかりの春あやふや  
暖房をいつまで入れむ窓景色  
山梔子の実に夕栄えのいつまでも  
一間より点り初めたる春の家  
鴨も甘きを知れりはうれん草  
谷戸冷えてはうれん草に甘味増す  
粗き日に切れ込み深きはうれん草  
金盞花鳥の毛並みを思はする  
春近く林火の巨船に逢ひにゆく  
鷗らに新装なりて春埠頭  
春荒れに忽然と発つ一巨船  
春荒れにベレー押さえて春埠頭  
浮鷗くるりと一転春が来る  
万国橋春かもめ翔び翔び尽きず  
隣り合ふ二巨船春の日を弾き  
春が来る港鷗のモニュメント  
うち靡き春の巨船の万国旗  
浅春の巨船見上ぐるベレー帽

陽炎ひて世界一周の途の巨船  
探梅の坂先づ攀ずることよりす（大倉山）  
探梅の人やり過ぐす斜面（なぞえ）径  
写生して一木（ボク）の枯れ描き添ふる  
枯れ描くに消しゴム素早く使ふかな  
枯木の根見てもなんにも始まらぬ  
山頂の枯木は風に背を曲げて  
探梅や敢えてこの径選びけり  
写生の眼上げ下げしては梅を描く  
白群青（びやくぐん）の日本の空梅かほる  
通りすがりの人の云へる  
癌といふ爆弾抱え梅見とぞ  
白加賀は薄日を湛え至近距離  
山梅に顔もつてゆく斜面径  
早梅や山間を吹く風探る  
芹摘みに泥跳ね痒し鼻の辺り  
彩（いろどり）の乏しき山や木五倍子に芽  
賢き哉檜の冬芽に副芽あり  
探梅にうつつを抜かす顔ぶれは  
なまなまとはうれん草の曲ある葉  
刮（こそ）げをる梅林の土しぶとときを  
時計見て白梅の其処離る人  
おにぎりの包解く音梅ほとり  
梅林に一人遊んでマイペース  
難しき顔して梅を詠む御仁  
梅林のはてこの道でよいのかしら  
春になる前の日差しに坊主山  
授かる匂なく梅林を出てしまふ  
枯蔓に鉄橋わたる車輛音  
枯茎に翔つ構え見せ菖雀  
春一番葭の擦れ合ふ河原べり  
翔つ鳥の羽音拡げて枯れ河原  
めつきり春人も小鳥も河原に降り  
浪人生何諳んずる涸れ磧  
土筆摘む自転車堤に横たえて  
枯れぶりもどこかおほらか川辺の木  
春光の魚道の段差水玉跳ね  
春の川渡りとよもす東横線  
芽も幹も照りてのっぺり川辺の木  
春の川原堤何處より登ろうか



緑釉の池に亀鳴くとき来たる  
鰻をり光湛えて桶の底  
大鰻動けば光たゆたへり  
鰻焼く団扇捌きも年季もの  
鰻描く腹を真白にたらし込み  
鰻這ひ光の波動生みにけり  
日の遁げゆく机辺に春を惜しみけり  
敷石をうしろより来る露のひと  
女郎蜘蛛ひたすら待つこと営みに  
川沿ひに花すすき細長き景  
泡盛が好きで根っ子の強きひと  
初湯殿声のまほらに温もれり  
あべこべに肌着着たるか大旦  
術後の夜の東京タワー夏バージョン

● HAIKU200403sono1

鴨どり来頬にちよつぱり紅さして  
春の鴝窺はれをるその仕草  
春の鴝仕草覗かれ居ろうとは  
きいきいと啼いて判然春の鴝  
正面に現れてまさかの春の鴝  
素っ首をくるりくるりと春の鴝  
去ぬときの啼音正しく春の鴝  
己が頭てる音の中なる春の鴝  
じつくりと鴝の啄むもの見をり  
退き際も至妙と云へる春の鴝  
知らず来て冬のひばりを発たす丘  
春の鴝飛び去る方より夕栄す  
春の鴝淡き麗姿に充たさるる  
見応へある後姿を春の鴝  
師系とくにややこし蜘蛛の糸よりも  
さんしゆゆの彩させる芽の暮れかかり  
さんしゆゆの呼び込む冷えに佇めり  
桃の枝のすっぱり剪れて節句空  
桃の花剪ればみすぼらしく見ゆも  
裁ち物の音のぞりぞり春の昼  
足裏の魚の目つききゐて春寒  
妻実家に戻り居る日や丁字の香  
塀囲ひなる如月の墓石の頭  
つちぐもり床づれにまた手がゆきて  
桃の花など見て多少寛いで  
じつとして何待つとなく浮寝鳥  
風蘭のとりつく枯木の梢あふぐ  
啼き惜しむこゑから察し春鴝か  
魚氷に上るその感大いにある日和  
春の水落ちし処の水皺む  
万作の隙間を縫ひて風通ふ  
咲いたかと思へば散りて桃の日々  
春近き日溜りにゐて土篩ふ  
土篩ふ手もいそいそと春さきがけ  
頼みぬし庭土届く春隣  
行きずりのこれある哉の花ミモザ  
桃の花鄙びごころを大切に  
紅める枝をここだく春の山  
雑木騒何時になったら山笑ふ

出来るだけ黙ってゐてよと壺すみれ  
万作の日差しを懈くおもふ日も  
コンビニに先回りして桃の花  
近く見て遠く見て佳し桃の花  
抱き上げて孫を溺愛宵節句  
リクエスト長閑に受けて飴細工  
ひやひやと川越駄菓子あんこ玉  
飴作り棒飴伸す音のどけしや  
初老とは何時からのこと古草見て  
如月の帝國書院の地圖ひらき  
遠浅の海ある町の春片雲  
春荒れに吹きちぎられし一片雲  
遠足の三人一組手を繋ぎ  
遠足の揃ひの制服揃ひの帽  
遠足の子の擦り足のだらだらと  
草亀の一投足に日脚伸ぶ  
北風吹いてけもの狂ひの雑木山  
雑木鳴る山裾の芹摘み倦まず  
春荒れは海の方より雑木騒  
あらもう咲いていたのね桃の節句花  
お隣りの方向き咲ける桃の花  
お隣りと愛で合ふ垣の桃の花  
庭石に母摘みかけのはこべ草  
セロハンに包まれ花舗のフリージア  
海へ出てよりの俊足春の雲  
辛夷の芽躍らす風のひつきりなし  
辛夷咲くこんな調子で風吹けば  
雑木の中一際辛夷の芽吹きかな  
四万の病を治す温泉に風花（四万温泉）  
七輪と椅子など公魚釣セット  
白鳥発つ今か今かといふ構え  
宵節句灯の暈大き玄閑灯  
家々に趣合はせ桃の花  
梢伝ひこの黄昏を来し鴝か  
芦の根方算を乱せる蛸蚪居りて  
バラ肉の筋嚙み切りて寒四郎  
塩辛にときをり甘味寒明くる  
古草と石垣棚田守りゐたり  
餅搗のごとくに田畦の土竜打  
蜥蜴をば恐竜と見る陽炎ふ中

凍滝の天地結んで一柱  
空腹に鶉の地声の筒抜けよ  
ニユース解説ボカし映しに桃の花  
木五倍子でも咲いてをらぬか裏の山  
芹摘の顔見ゆ辺りまで行きぬ

懶祭忌いたづらに句を深読みすな  
頬被しておいて舌おでん酒  
風揚げの気ばかり急いで滅茶走り  
柚子湯の柚鎖骨の辺りに寄り着きて

鶉の啼く方はと見れば庭椿  
太陽に面上げて咲く桃の花  
たつぷりと日を吸ふ布団花桃も  
二階に干す布団緋桃の枝の先  
鶉の去る椿の茂み森閑と  
鶉何處ぞに居るかと思れば揺れ椿  
間延びして電柱の間春の昼  
電工の登つてゐさう春の電柱  
万作にちりちりと日は音立てゝ  
裏木戸がまだあり傍に山梔子も  
突っかけが慣らひとなりて涸川まで  
如月の留守居忠犬ハチ公めく  
夕栄と夕焼のあはひ春のそら  
着膨れて福神漬を零しけり  
料峭や投函に出づ身を締め  
シベリヤを食（お）せばいよいよ寒明くか  
シベリヤの甘味残りし舌余寒  
眼鏡の染み拭へば消へて春隣  
眼鏡のつる擦れし一処寒戻り  
てんぷらの種に青物春近し  
皮厚き朱欒と中味の落差かな  
陽気まだどつちつかずの冬木の芽  
花びらの何處か湿りて花杏  
日永さやチラシで作る紙の函  
庭土のつめたく黝く杏散る  
老眼の霞み目懈し花さんしゆゆ  
紙碑として一集編むや轉れり  
先達としての朱欒の坐り佳し  
一向に伸びぬ万作庭隅に  
ショーケース眺めて通る春の肉屋  
いっぺんだけ試して止めし紙懐炉  
ほたはたと雪落とす木々炬燵炉  
汝の話一環しをり甲羅酒  
如何やうにも風に曲れる滝飛沫  
ややこしき句は皆御免鳩麦茶